

ポストコロナの時代の情報リテラシー - デマと真実の境界 -

テクノ未来塾 WEB自主ゼミ(合宿?)

2020年5月16日

松嶋

日本のコロナ対策「奇妙な成功」共同通信

- 米外交誌フォーリン・ポリシー(電子版)は14日、東京発の論評記事で、日本の新型コロナウイルス感染対策は**ことごとく見当違い**に見えるが、結果的には世界で最も死亡率を低く抑えた国の一つであり「(対応は)奇妙にもうまくいっているようだ」と伝えた。
- 同誌は、日本は中国からの観光客が多く、ソーシャル・ディスタンス(社会的距離)の確保も中途半端と指摘。感染防止に有効とされるウイルス検査率も国際社会と比べ低い**が「死者数が奇跡的に少ない」**と評した。さらに「**結果は敬服すべきもの**」とする一方、「単に幸運だったのか、政策が良かったのかは分からない」と述べた。
- ニューズウィーク：日本の「生ぬるい」新型コロナ対応がうまくいっている不思議 (日本に対する偏見に満ちたひどい記事)

コロナの抗体検査の破綻

- 東京と東北地方の献血から調査
 - 各500件ずつ(東京3件、東北2件検出)
- 500件の検査なら東京で2.6万人の感染者(トータル)が検出限界(献血する人は、「普通」は健康)
- 「ゲームチェンジャー」という、ヒトの検出にしか役立たない。
- そもそも、検査はゲームチェンジャーにならない。

日本の特徴

- なんでもうまくいっているのか、自分たちでもさっぱりわからない。(見えない神風)
- 他国にできるアドバイスは、真似をしないほうがよいということだけ(韓国の正反対の態度)
- マスコミが重要な情報を伝えない
 - 特別定額給付金の申請にマイナンバーカードが全く使えないことなど
 - PCR法・抗原検査・抗体検査の違い、検事法改正はやりすぎ、まして、サクラは要らない。

ポストコロナの情報戦

- 対コロナで、当たり前前の理解力がない
 - お医者さんに「出口戦略」を訊いても無駄（医者にはリスクを取れない）
 - リスクは、政治が判断すべき問題
- 米国、中国の情報戦略
 - 積極的な「バレバレ」の「謀」略
 - 「声の大きいものが勝ち」の時代へ
 - 弱者を騙せれば、十分

ポストコロナの情報戦(その2)

- 背景: 既存マスコミ、国際機関の信用の失墜
 - 垂れ流し報道で、人々から不信を招く
 - ネット経由で補完情報をとる人が勝者に
 - 「情弱」だけが騙される
- 米国、中国の争い
悪い意味で、中国が「主役」の時代に

未来塾のこれからの方向性の提案

- 塾生個々の持っているデータや知識を(秘密裏に)交換して、表面に出てこない真実を知りたい。
(ポリティカル・コレクトネスとの戦い)
特色:色んな分野の専門家が集まっている
- これまで、頻度が不足していて、十分ではなかったが、FBやZoomなども利用して、情報交換の頻度を高めていけませんか。
(もちろん、PJ、サークルなどで行っていますが、塾内部での情報面だけのものも)